

2025 年度
東京藝術大学大学院美術研究科
博士後期課程学位論文

「像」の力

東京藝術大学大学院美術研究科
博士後期課程美術専攻油畫研究領域（油畫技法材料）
学籍番号：1322910
潘 雯菲

はじめに

「像」は文化に溶け込み、生活と生命に対する人々の理解に静かに影響を与えていた。本論文は力を秘めた像（イメージ）を対象として、その「像」の本質を再考し、哲学、心理学、神秘学、そして芸術の観点から、「像」が持つ可能性と重要性について考察していく。本論文で論じる「像」とは、人が関与し、道具や素材を用いて創造された平面または立体であり、一定の情報を内包する精神的実践を指す。

遠い昔から人々は「像」に関する探索を続けてきた。原始時代の人類は洞窟の中に狩猟や舞踊の「像」を残し、器物に部族のトーテムを残した。その後彼らの子孫は自然を観察することによって生活に「像」を溶け込ませ、文字が作れるようになった。そして「像」は多様な領域に拡張され、世界を理解する手段となった。芸術家は創作した「像」の本質探しを迫られ、作品に説得力を持たせる新たな手法を見出すことに駆られたのであった。

人類はかつて動物と同じように本能的な予知能力を持っていましたという。進化に伴い、五感が強くなった一方で、予感は退化した。あるいはその感覚を残している者もいるだろう。私はとても敏感な人間だと自負しており、急に何かの予感がして心が落ち着かなかったり、時にはぼんやりと間もなく起こることを夢に見ることができたりする。このような状況が起きた時は、周りの人に連絡してその夢に出てきた彼らの安否を確認する。この予知感覚は、私に「私は誰なのか、私はどこからどこへ来たのか」についての答えを探すように促した。

幼い頃の私はひろく世界を知る経験を得たいと思い、13歳で一人上京し（北京）、生まれ育った場所を離れた。ここ数年の成長を振り返り、特に中国から日本に来て故郷との距離感に気付き、逆説的に故郷に憧れを感じるようになり、その地を捨てられないと確信させられた。それは私の記憶の中に深く刻まれ、私の血の中を流れている。

この混乱した時代を生き、突然の災難や悩みに直面して、焦りや不安が隅々に溢れている。暗闇の中で、私は自分が操る運命の手を振り切ることができない人形のように感じることがある。その際に、かつて見たり、聞いたり、学んだりした「もの」が、記憶の奥から湧き出し、乱れている世界をどう見るかという私の視点に影響を与え、役割を果たしている。「人間万事塞翁が馬」「無為自然」「万物齊同」「樂天知命、故不憂」これらの中の伝統的な思想は絶えず頭の中を巡っている。耳のあたりで、「運命の無常、人と自然の関係、生命と未知の世界への畏敬は非常に重要である」という声がこだましている。

博士学位請求のために制作する作品の中で、中国の伝統的な思想から得られた易、道、無為、隠逸などの要素を取り入れ、「像」の力を活性化しようと試みた。予感がもたらす不安を「像」によって解消してみたり、森羅万象の変化における運と不運、運命に関わる心の動きを探求してみたりした。

図像が氾濫する時代に生まれた私が最も早く出会ったのは、幼い頃の学習カードの「像」を通じての言葉の勉強であった。「像」は言語と違うシステムに属している。「像」は無言の存在であり、人の想像力を支配する一方で、言語と相互作用を有している。「像」の意味は、最終的には言語によって確かめられる。しかし、そもそも原初の「像」とは何か、

どのように創作できるのか、言語で意味が確定する以前に何を暗示するか、眼と心の対話を「像」によってどのように発揮させるか、これらを作品制作を通して追求することが、私にとって重要なのである。

本論文は、創作者の視点から、古今東西の「像」、最終的には自作品を参照しながら展開する。絵画創作により「像」の深い力を探求することは、「哲学の像」「心理的な像」「神秘学の像」という特殊な像を分析する興味へとつながった。自分自身が実際感じたことのある予感体験と、中国の伝統的な易思想に対する理解とを交えて論じ、「像」の有効性を詳しく探索してゆく。視覚的な思考がもたらす合理性の確立を目指すことで、より深い「像」解読の可能性を提供したい。

本論文は、以下の6章で構成している。

第1章は自分の育った環境を踏まえ、「像」を創作する背景にある原動力を探しながら論を進めている。出身地にある「像」を例に、中国山西省の民俗（衣・食・住・樂）を出発点として、仏教寺院及び道觀と墓葬に対する考察とも結びつけている。秘境の中にある、神仙思想に基づく「像」は、超感覺的な神秘をその場に呼び込み、見る者を沈思に導く。人々を幻想的な時空に誘う特定の空間や儀式における、特別な図像の役割を現在の私の視点から再検討する。

第2章は「像」の起源と発展を振り返り、芸術家イコール「巫」であるという仮説を提示し論証する。鍊金術・通靈術・心靈術・予言など、巫を自らの創作に融合させた芸術家と作品を列举し、彼らの創作の背後にある深層的な核を探索する。「像」が力を持つ要因の一つに、「創作者が巫であること」を認識する要点にある。予言図像を例に挙げ、「像」が発展する過程でどのようなメッセージや方向性を人間に与えてきたのか。その多様性を明らかにする。

第3章は文字と「像」の相互関係を論じていく。明時代の絵入本『魁本対相四言雜字』を例に挙げ、図と文の複雑な関連と柔軟な互換性を述べる。このほか絵本とその挿図を例に挙げ文字と「像」における叙事との連続性を論じる。文字と「像」が対立する、という観点から、山西省に所在する宋・金時代の壁画墓の墓室に表された詩文、さらにはマグリットの文字創作における「像」と文字（図と文）の矛盾などの図文交換の例を挙げ、視覚的思考の可塑性を提示し、次章・哲学の「像」論に関する思考を引き出したい。また東洋の王維と西洋のウィリアム・ブレイクの作品の中に詩画融合という点を見出すことで、文字と像との高度な互換関係を再認識し、私自身がなぜ自作に図・文を合わせる形式を選ぶのかを自問する。

第4章は、哲学における「像」と心理における「像」科学における「像」医学における「像」を考察し、視覚的思考の可能性を再考するなかで知識的な図像の合理性を探求する。

第5章は、中国伝統文化の中にある奇妙な「像」を例示し、易に対する自己自身の理解と体験と結びつけ、生活と文化における「像」の有効性を論じる。あわせて、自作の依託する文化元素を紹介したい。

第6章は、自作を参考しながら、「像」に込められた力を述べる。

私は、絵画は「見る」という目的のみならず、そこに描かれた題材や物語から、「先人の、命に対する態度や考え方を読む」ためのものだと考えている。特に東洋においては、中国を源とする哲学思想の影響を受け、多種多様な力を秘めた「像」が各地で生み出され

た。人類の歴史の流れの中で「像」を再定義することによって、作品が生まれ受容された時代の思想と文化を捉え直すとともに、時代を超えて見る者の鏡となる「像」の力を再認識したい。